

号外（欧州の事情） No.3

LONDON 2012！

～2012年の五輪はロンドンのブラウンフィールドで開催～

昨年7月にオリンピック&パラリンピック2012の開催地に選ばれた英国ロンドン。最終選考ではフランス パリと接戦を演じ、見事にホスト役を勝ち取りました。この五輪誘致活動にあたってロンドンから国際オリンピック委員会(IOC: International Olympic Committee)へ提出された入札資料は600ページにもものぼったといわれています。さて、どんな内容が盛り込まれているのでしょうか。

ロンドンの入札資料には、五輪開催がロンドンに与える社会的そして経済的影響について多くの情報がつづられており、特に、重度にブラウンフィールド化しているロンドン市東部の再開発プロジェクトに焦点がおかれているようです。ここで東部にあるNewhamという自治体をご紹介させてください。人口約247,000人を抱える同自治体では、人口の約40%が経済的に何らかの問題を抱えており、子供人口の64%は貧困エリアに住んでいるそうです。更に、住民の約60%が有色人種という事実があり、人種差別問題と環境問題がリンクして認識されていたらうと想像されます（環境正義問題と呼ばれています）。このような街に、150年の歴史上最大規模のオリンピック公園(Olympic Park)が創造され、雇用が創出されるのです。ここでオリンピック ゲームが実施される！！これには多くの住民が喜びをかくせないといったところです。

それだけではありません。同市の再生事業計画には120ヘクタールに及ぶ緑地空間を創造する計画がもりこまれており、緑との共生の重要性を強調しています。このプロジェクトには号外2でご紹介した「Forest Committee」がサービスを提供するようです。その他、環境面を最大限に考慮したインフラの構築、温暖化問題を意識したゼロエミッション戦略、河川の修復などが計画に含まれています。まさに、2012年の五輪開催は、ロンドンのブラウンフィールドを再開発するにあたっての触媒として作用しているのです。

さて、2006年8月のロンドン開発局の記事によると、オリンピック公園開発にあたり既存建物の解体工事や汚染土壌の浄化修復を担当する企業が決定したそうです。数にして14社。その中の2社Edmund NuttallとGalliford Tryが統括役を任命されています。対策として挙げられているのは、アスベストの除去、土壌不溶化、土壌洗浄、分級選別、地下水浄化、熱分解、バイオレメディエーション、浚渫、地中壁工法などであり、オリンピック開催時期だけではなく、長期にわたる土地再生を見込んで計画が練られているようです。

今日から同五輪が開催されるまで、ちょうど5年と10ヶ月0日。この長い道のりの中で、

1人でも多くのロンドン市民に幸せをもたらすプロジェクトの計画、そしてその成功を祈っています。